礫陵新聞

発行所
若松高校新聞部
北九州市若松区小石
発行 編集
若松高校新聞部
印刷所
吉田印刷所 ☎5424

行事予定

12月24日	終業式
1月1日	元旦
8日	始業式
下旬	三年期末考査
〃	一・二年中間
2月上旬	予餞会

生徒は無関心過ぎる

またも信任投票

▽ 暮れ迫る会長とする執行部は、十月二杯で任期を終え、多くの問題を残して退陣した。後期執行部の活動も、ようやく軌道に乗りだした様子だが、未解決問題処理や、これから、今年度追い込みの三学期を迎えるだけに生徒の期待は大きい。

まずは身近な問題を

我校生徒会は十一月二十日、体育館に於いて、生徒会改選の立合演説会を開き、その後すぐにH・Rで投票を行なった。今回も又実質上は立候補者七名であり、いわゆる「マルバツ式」の信任投票をすることを余儀なくされた。他にも一年生の立候補者があったそうだが、選挙管理委員会の手違いで選挙に間に合わなかったという事実がある。この点については一般生徒から、生徒に納得のいくように、事態に応じた適切妥当な処理を行ない、正しい選挙を行なってもらいたいという意見があり、選管委も反省の色を示した。

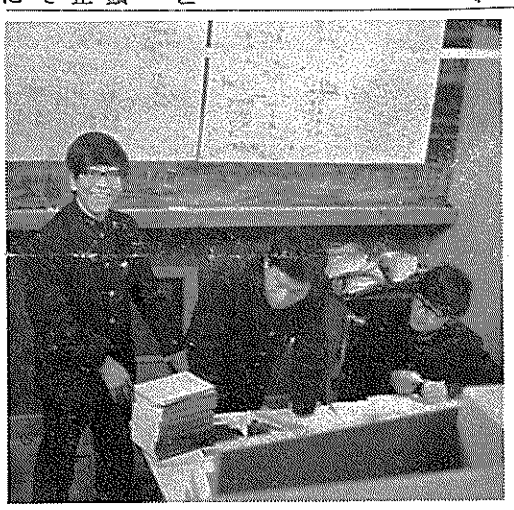
演説会では、単純明朗な演説が殆んどで、公約を並べ立てる者もなく、会は短時間で終了するという異例なものであり、批判の声が多く聞かれた。しかし、結果としては、書記候補者が不信任に終っただけであり、その落選した候補者も補欠選挙で結局当選したというものであった。

生徒会執行部役員の構成は、次の通りである。

会長	二の十	植田 治男
副会長	二の十	坂口 春典
	二の七	成本 勝彦
書記	二の三	竹重 公雄
	二の六	田之上照典
会計	二の七	城戸由紀夫
	二の七	江熊 史郎

今後の執行部の方針としては、根本問題の解決を計る一方、生徒に身近な最も切実なる問題から一歩ずつ改善していこうということを打ち出している。その内容は、ロッカーの使用について、帽・頭髪関係、ナップサック、盗難防止対策、最近目立つ遅刻の件等までで事実、我々生徒にとって非常に身近なものばかりである。執行部としては、やはり、「生徒の為の生徒会」という事に観点を置くことによって、生徒との密着を計るという要素を含んでいると思われる。

生徒会は、このようなことを我々がやっ気になって働きかけても一人相撲になりかねないとし、これからは、生徒に生徒会の実態を知ってもらうため、これからの行事予定等を放送で流したり、プリントを配ったりして、皆に働きかける予定である。



活動を始める新執行部員

8:3は公平か？

予算編成を前に

現在、本校には、十四の運動クラブと、十九の文化クラブがある。数からいえば、文化クラブの方が多いのだが、予算の面では、その逆になっている。今年度は、運動クラブ予算と、文化クラブ予算の比が、八対三であった。

又、クラブ予算は年々減ぜられているが、その額は、文化クラブの方が、運動クラブより多くなっている。四十三年度と四十四年度の差は、運動クラブが約二万円減であるのに対し、文化クラブは、その四倍の八万円減にもなっている何故、このような結果になったのであろうか。

執行部は、理由として、文化クラブの活動の低調さを挙げている。具体的にいうと、文化クラブは、その多くが部室に閉じこもり目立った活動をしていないということだ。それに対し、文化クラブ側は、予算が少ないので活動しにくいことを訴え、これに反論している。予算が少ないから活動出来ないというのは、単なる言い訳に過ぎないかもしれないが、これを全く無視することは出来ない。現にあるクラブでは、本を出すはずであったがそれを取り止めざるを得なくなり又、あるクラブでは、予算不足を補うための個人負担額が、年間数千円にも達している。

文化クラブは、活動が地味で、目立たない場合が多いが予算は活動の程度や状態によって決められる。ここでもう一度、クラブのあり方を検討してみる必要があるようだ。執行部は、もっと広い視野に立って、文化クラブの活動状態を判断し、その存在価値や、先に述べた現状等を考慮し、公平な立場で来年度の予算編成に当たることが望まれる。

来年度大幅改善成るか

文化祭　くるしい賄い

若松高校第二十一回文化祭。いまから二カ月ほど前、文化部の研究発表と活動内容の提示のため開かれたものであり、その外には、開会式当日の九州交響楽団の演奏や、県内一位の実力をその後示した演劇部の劇などが催された。この文化祭を行なう前置として、実行委員会が組織され、企画から予算配分、及び、前日の会場作りまで、そこによって進行がなされた新聞部の文化祭見学や他校訪問などの報告によると、我校の文化祭予算が、他校に較べ非常に少ないということであった。つまり、我校と小倉区内の高校との比が、二対一から三対一だそうで、相当の差が認められることである。あるクラブの文化祭に費した金額は一万二千円ほどだが、文化祭予算の少ないことから、そのクラブ予算としては四千五百円余りしか与えられず、差引き七千五百円の赤字を出したクラブがあり、これからの活動に支障を来すのではないかと心配し、その検討を急いでいるようだ。

旧執行部は、この予算についてはしかたがないという妥協的な見解を述べており、又、文化クラブとしては、この様な状態を継続することは、これからのクラブ発展と活動を多分に妨げるとし、来年度の予算編成の時点に於いて、文化部を再認識してもらうことから問題として、活動費と同時に文化祭予算アップを計ってもらうということを、新執行部に打出す方針である。

今までに述べたように、文化祭予算への不満というものが深まりつつあるようだ。このような問題に、どのように対処して行くかという執行部の今後の動向に興味が持てよう。

第二十回西日本高校演劇コンクール

みごと！一位の栄冠

カンパ有難う

第二十回、県高校演劇祭で、若高演劇部が、みごと一位を獲得した。この演劇祭には、県下六十四の高校が参加した。十一月二十三日～二十五日までの三日間、久留米市民会館で、福岡・北九州・筑豊・筑後の四地区代表の十六校が、自分達の演技を見せ、競い合った。ここで、主に目出ったのは生徒の創作劇が、ふえたことである。

若高演劇部も、部長の小森勉さんの脚本による、創作劇であった

しかし、自分達で創作したものであったため、窮地に陥るということがないということで、何度も作り直したそうだ。中でも、照明による効果を上げる為に、そこに最も注意をはらったそうである。

そうして、演劇祭に挑み、そこ

一、「殿様」（小森勉作・創）若高

二、「落葉」（のみ山峻作・創）

三、「白いドアのある家」（石橋広作・創）八幡中央高

この三校は、十二月二十・二十一日に、宮崎県都城市民会館で行なわれた、第十一回西日本高校演劇コンクールに、出場したのである。

十二月になり、演劇部では、猛練習の合間に、今度、宮崎に行く為、遠征費を集めていたが、十七日頃の集計によると二万数千円ほどもあったそうで「当日のコンクールには、若高生徒諸さんのためにも頑張って来ます」と意気込んでいた。生徒も演劇祭の時より一層すばらしいものを演じて、良い成果を収めてほしいとのことだった

図書コンクール　一位は我校のもの

第二次審査パスか

去る十二月九日、午後二時より九州地区学校図書館協議会と、西日本新聞社主催による、九州地区学校図書館コンクールの、第二次審査が行なわれた。

このコンクールは、図書館の充実と振興を図り、よりいっそうの機能の発揮を助長するために行なわれたもので、参加出来るのは、小学校から高等学校までの学校図書館であった。

審査員は、図書館の設備・運営図書委員の活動状態等の優秀な学校を、第一次、第二次審査によって選考した。

第一次審査は、書類だけで行なわれ、それに合格した図書館には第二次審査とは、審査員が視察に来て、図書館関係の先生や、司書、生徒図書委員に直接質問したり、記録設備等を見て、審査することである。

我校は、第一次審査に合格し第二次審査が九日に行なわれた。まず審査員一行は、潮騒の間に於いて、図書館長等と会合。続いて視聴覚教室で、図書館に関するスライドを見て、閲覧室に於いて、改めて挨拶、紹介が交された。その後、専門的な審査が行なわれ、閲覧室に並べられた活動を示す諸記録の点検、運営に関するものが調べられ、審査員が、先生、司書に質問した。生徒図書委員には、三人の審査員が、委員の運営、活動状況等を質問した。

記録点検や館内調査をした後、閲覧室に於いて会合。審査員より寸評があり、四時過ぎに、無事、第二次審査が終了した。

正常化が必要

―会長抱負―　生徒会活動

まず、述べたいことは、現在の生徒会活動において、生徒の皆さんの関心が、あまりにも薄すぎるということだ。私が演説会の時、公約を述べなかったのは、前期に生徒会解散も叫ばれていたようだったし、このような状態では、公約を発表しても、それ相当の事が果たせるかどうか疑問だったからである。

では、次に僕の生徒会の再建案をしきものを述べてみよう。（公約ではない。）

再建については、多分の努力が歩みを打ち出している。その内容は、ロッカーの使用について、帽・頭髪関係、ナップサック、盗難防止対策、最近目立つ遅刻の件等までで事実、我々生徒にとって非常に身近なものばかりである。執行部としては、やはり、「生徒の為の生徒会」という事に観点を置くことによって、生徒との密着を計るという要素を含んでいると思われる。

生徒会は、このようなことを我々がやっ気になって働きかけても一人相撲になりかねないとし、これからは、生徒に生徒会の実態を知ってもらうため、これからの行事予定等を放送で流したり、プリントを配ったりして、皆に働きかける予定である。

生徒会活動において、生徒の皆さんの関心が、あまりにも薄すぎるということだ。私が演説会の時、公約を述べなかったのは、前期に生徒会解散も叫ばれていたようだったし、このような状態では、公約を発表しても、それ相当の事が果たせるかどうか疑問だったからである。

では、次に僕の生徒会の再建案をしきものを述べてみよう。（公約ではない。）

再建については、多分の努力が歩みを打ち出している。その内容は、ロッカーの使用について、帽・頭髪関係、ナップサック、盗難防止対策、最近目立つ遅刻の件等までで事実、我々生徒にとって非常に身近なものばかりである。執行部としては、やはり、「生徒の為の生徒会」という事に観点を置くことによって、生徒との密着を計るという要素を含んでいると思われる。

生徒会は、このようなことを我々がやっ気になって働きかけても一人相撲になりかねないとし、これからは、生徒に生徒会の実態を知ってもらうため、これからの行事予定等を放送で流したり、プリントを配ったりして、皆に働きかける予定である。

クラブの充実を

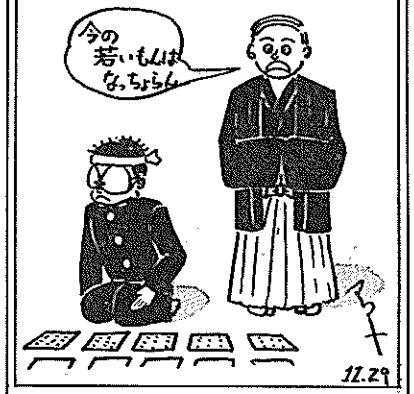
ふやしてほしい予算

（ブラスバンド）

去る十一月十六日、響南中学ブラスバンド部が、名古屋で開かれた全国大会に出場した。結果は第四位と好成績を収め、当中学では喜びに湧いている。最近、若松区内の中学では、吹奏楽部が盛んに活動しているそうで、響南のほかは、高塚・向洋等が、毎年、北九州等で首位を占めている。が、昔は楽器不足で悩み少なく、クラブの存在も薄れてきている。これを機会に、クラブの充実を計ってほしいものだ。

若高戯評

◎方程式かるた



読み手，『カッコ x プラス…』
取り手，『えっと…x^2+2xy+…どこ』

礫陵言

今年もまたあわただしく師走がやってきた。寒さも加わって、教室へ急ぐ先生たちも文字通り走っている。小倉区の市街地などは道路工事の関係もあって、人と車の洪水で一歩も進めぬ混乱ぶりとか。それに総選挙のマイクとジングルベルの響きが重なって、喧そうなることこのうえない始末である。いつものことながら、年の暮れはあじけないものである。▼ところで今年一年の学園の歩みをふりかえってみると、やはり生徒会の動きが中心になっていたように思う。四月の香椎花園への歓迎遠足。好天にも恵まれて一日楽しい思いを味わった。五月は連休と中間考査で目立ったものはなかったが、六月はクラスマッチで論議を呼んだ。学校行事について、いわゆる「根本問題」が問題とされた。体育クラブの対外試合もさかんで、剣道部や庭球部の活躍が目立った。七月の若戸大会は雨方にたたられて、室内競技だけに終ったのは残念だった。また演劇鑑賞に戸畑まででかけたのも暑い盛りだったと思う。▼夏休み中における文化クラブの活動は、十一月の文化祭に見事花開いた。他校の文化祭と比べてみても、本校の文化祭は見どころのあるものが多いと思う。糸島高校の文化祭をみる機会を得たが、この文化祭は、文字通り糸島郡内の文化行事のメインエベント的な要素が強く、同窓生や近在の主婦や中学生が多くつめかけていた。本校の文化祭も、今年あたりそういった雰囲気がみられたように思うが、来年あたりからは、若松区の文化祭の中心になりうるようにしたいものだ。十一月から十二月はウインターシスポーツのシーズンでもある。校内マラソン、駅伝競争も例年通り消化されてきた。▼この間生徒会役員改選も行なわれた。候補者が出そうには時間がかかったが、当選のきまった役員の合い言葉「自分たちの身のまわりから」という地道な指導が立派に実を結んでほしいものだ。▼校舎内外の荒れ具合もひどい。もっと学園のすみずみまで清潔に整理して新しい年を迎えたい。（よ）

主張

青春時代を悔いなく

「青春時代とは、第二の誕生日である」と言った人がいる。私もそれに賛成である。人間が青春時代に入ることによって、「自我」というものに、目覚めはじめる。すなわち、人間として自発的に「もの」にぶつかることに目覚めるわけである。そうすれば、そこに当然人生に対する様々な疑問が湧いてくる。「人間とは、何のために生きるのか」「愛とは、いかなるものか」そして、現実と理想の食い違い等々のことに悩み始める。しかし、いくら悩んでもその疑問にふさわしい解答を、ひとりで見出すことは出来ない。そして我々は考えたあげく、友人、先生、尊敬する人、又は文学作品によって、その悩みの解消口を見出そうとするのである。それは、青春時代に与えられた唯一の宝物なのであろう。しかし、現在我々は果たして、それらを大切にしているのだろうか。

私はかつて、自己嫌悪に陥ったことがあった。そして、生まれてくる時、自分はどんな使命を宿されて生まれて来たのだろうかと考えたことがあった。自分自身の使命というものを今すぐ見つけようとして、あせればあせるほど、それは漠然としてつかむことが出来ないものと化した。私は考えたあげく「勉強」という答に達した。しかし、それは現在の絶対的義務のようなものではないだろうか。私は人にも相談せず、文学、つまり読書によって、それらしいものを見つけることが出来た。「ジェーンエア」の主人公であるエアの、強く自分にきびしい生き方に感銘した。そこに私は、一つの解答に等しいものを見出すことが出来た。私が思うには、「使命とは、現在生きている時点において、一番大切な目的に向かって突進する力」だと思いこれが私にとって一番よい解答だと思うと満足し、心の中がすっきりしてしまうものだ。

ここで私の尊敬している亀井勝一郎さんの文を引用することにしよう。「第二の誕生日である青春時代が、生涯にとって最も大切な時期だといわれるのは、大疑問に対してすなおな態度をとれるからであって、生涯貫く一つのすぐれた資質であろう。疑問が大きければ大きいほど、苦痛が大きいのは当然である。青春の悩みというものは、すべてとらえようのない問題に直面した時の、もどかしさである。」

青春時代の象徴は、ニキビと悩みではないだろうか。ここでその悩みによって、自分自身を精神的にどのくらい向上、成長させるかが問題になるわけだ。それには、どんな問題でも疑問を持ち、自分の限界の力を思いきりぶつけるところにある。それらを答えることが出来る事業うのが、文学ではないだろうか。ここにおける文学の位置は、非常に高く人間と等しい姿をとるものである。しかし、良書を選び出す力は我々にはまだ足りないと思う。だからといって人の力に頼るのはいけない。あくまでも自分自身で良書か悪書かを読み見分けるべきである。

ここであえて言いたい。「読書の秋」というが、読書に季節はない。つまり、いつ何時でも読めるわけだ。しかし、社会に入るとその機会が少なくなることは確かである。今の時代しか、本を読んで回想にふける時期は勿論ないだろう。今のうちに、いろいろな本をどんどん読んでほしいものだ。

青春時代とは、一生に一度、力を十二分に発揮できる時である。そして、それは非常に短い期間である為その時代に、自分のやれることは否、やれそうもないことでも手を伸ばして、やってみようではないか。もし疑問に会えば、おおいに悩めばよい。その解決法として文学に親しんでほしいものだ。我々、個人個人の青春時代を文学時代として、大きく躍進して悔いないものにしようではないか。

行動に秩序と責任を

高校生の政治活動

10・21反戦デー以来、特に話題となってきた高校生の政治活動。我々に一番身近で、かつ、最も大切なこの問題を、どのように見ていけばよいか。また、高校生としては、どのような知識をもち、どのような行動をとればよいのか。今、この問題を、学生・教師・父兄の立場からながめ、それぞれの見解の違いなどを探求し、政治というものの意義性を考えていかなければならない。そこで、市内の学校を中心にこの問題を見ていくことにする。

今日、この高校生の政治活動という問題が、以前より外面化されてきたが、一体、高校紛争の真意は何なのであろうか。反戦・学内制度の改善・現在の教育制度の改革なのか。それとも若い力の大人への反発なのか。それは、大学紛争の投げ掛けた波紋であるかもしれない。今や、それは高校生の間に伝染病のごとく飛火してきている。そればかりでなく、現在では中学生にまでもその火の粉が降りかかっている。それは一概に否定されるものではない。

この問題に対し、生徒は「高校生だからといって、活動をすることは別に悪いとは思わない。政治に関心をもつのは、ごく自然のことであり、活動するのに大学生だから、高校生だからという年齢的な区別をするのはおかしいと思う」

しかし、暴力的行為をするのは許されない。他人に迷惑をかけるので」という意見が多いようだ。しかし、父兄から見ればその意義がどうであれ、参加してもらいたくないのであろう。頭から反対する親が非常に多い。また、先生方の意見も一般的にみて、父兄同様、参加することに反対する先生が多い。しかし、「行動をする場合、それがどこの政治団体にも利用されないような活動が望ましいが、それは大変むずかしい。たとえそれが、何者にも利用されないものであったとしても第三者が、いかにも何かに利用されているかのごとく錯覚する場合が非常に多いだからといって、活動することを否定するのではない。」という先生もいる。

乱入する学生たち

このように、政治ということばが付くと、法や道徳にも関連してくる。だから、この問題を簡単に考えてはならないのである。

自分の考えを持て

ではここで、北九州市内での高校生の政治活動を追ってみよう。

先ずこの運動の口火を切ったのは、小倉高の10・21反戦デモではなかったろうか。このデモの中心となったのは、三年生の少数であり、参加者のほとんどが三年で、二年が四、五人いただけで、一年は全くいなかったそうだ。そして、この背後には、小倉闘争連合・全学闘争会議などがついており、まさに、大学生並の様相を呈した。しかし、あくまでも高校生らしい立場をとるために、制服デモを行ない、ほんの数人を除いては、どの派にも属さない、無党派の立場でデモをし、あくまでも、ただ〝反戦〟のみを叫ぶものであったらしい。そして、このデモは、他校に大きな影響を与えたばかりではなく、大学の政治グループや、その他の政治団体にも波及した。

先日、この運動の処分が決まった。それは、東京へ行った三人の者が、一週間の停学となったが、他の者は説教されただけで別に処分はされなかった。そして、今では、学校側の規制もはげしくなったためか、運動らしきものは全くなく、ごく当分、活動しない様子である。

このデモのあと、すぐに、若松高でフォーク集会が開かれた。これは、文部省の通達に反対するのと、何でもよいから話し合おうという趣旨で行なわれた。

この会は、小倉高の場合とは異なり、区役所、学校の許可をとって開かれたもので、いうなれば、規制内での行動であったといえよう。

討論の内容は、現在の政治への不満、学校制度の批判、社会の矛盾などさまざまであったが、一応活発な意見がでた。それにまた、内容もとても充実していた。

しかし、一部の生徒から、フォーク集会という名で会を開いたので、このフォークソングという餌で生徒を釣ったような感じだ。だから、これから、このような会を開く場合、正々堂々と〝集会〟という名で行ない、議題をも明確に決定し、全校生徒に何らかの方法で知らせるべきだ。という意見も聞かれた。

このような盛んな活動があったが、現在では、小倉高と同じく、全く運動らしきものはない。

この会の後、今日に至るまでは八幡高が焦点となっている。

そこで、高校生の政治活動がこれは、マスコミ、大学紛争の影響ばかりではない。日本国民である以上、日本の政治に関心をもつことは当然である。しかし、この場合、自分なりの方法で政治を勉強し、考えを固めておく必要がある。ただ単に、参加するだけではだめなのである。

投書箱

▽現在、若高で盗難が多い原因は生徒に罪意識がないか、又はそれを感じながら、平気で行なう横着者が多いからに違いない。中でも上ばきがよく盗まれるのは、校舎内がきたないからだと思う。もっと美意識を持つべきである。

クラブ活動に使う金に、むだが多すぎる。もっと深く考えて、使うべきだ。必要以上の金を要求せず、今後はっきりと、領収書等を執行部会計に手渡すべきだ。もしどうしても金が欲しいなら、それなりの活動をすべきだ。なぜならばクラブになれない、同好会があるからだよ。

先生と、生徒との対話の機会は成績表を頂く時だけだ。これじゃつまらないよ。

学校に花が少ない。寂しいね。花いっぱい運動を呼びかけろよ。

不満がいっぱい

▽最近、無帽登校が非常に目立ってきた。我校では帽子をかぶるように決められている。ところがそれが増えた事に対しては、風紀委員会では何も対策をねらず、又委員会を開こうともしない。こういうことは、校舎界の人々の心に、奉仕の精神をつちかう事ができるなら、どんなに素晴らしい社会になるだろう。マンネリズムに浸っちゃいけないよ。

▽現在、若松高の清掃は、LHRの時間に行なわれている。LHRは皆の話し合いの時間、皆の優和を図る時間であるはずだ。少なくとも遊ぶ時間ではないのだ。LHRの必要性というものは、高校生という立場にいる以上、少々なりとも理解しているはずだ。LHRをもっと有意義なものにしていこうではないか。

いびつな基地経済

日米首脳会談の結果、沖縄が一九七二年に本土に返還されることになったことは、すでに承知のことと思う。

しかし、「復帰したら、生活はどうなる」と、自問して不安を感じない沖縄県民は、ほとんどいないだろう。まず、第一次産業のサトウキビ、パイナップル中心の農業は、本土の甘味資源保護育成措置でかろうじて成り立っている。だが、五万五千戸のキビ作農家の一日当たりの家族労働報酬は二ドル四十五セント（八百八十二円）と他産業の半分以下の収益である。

二次産業はどうかというと、物品税で保護されている業種が多い。例えば、ビールは輸入ビールの百リットル四十七ドルの消費税に対し、沖縄産ビールは二十六ドルの酒税で保護されている。復帰でこのような保護措置がとり払われたら、競争力において一たまりもない。

第三次産業はもっと深刻である。ショッピング観光でにぎわうみやげ物店、貴金属、高級時計、スコッチウイスキーの五パーセント、香水一〇パーセント（本土では四〇パーセント以上）という低い物品税がもたらしたものにすぎない。復帰してこのうまみがなくなったら先は見えている。観光客や基地米兵が落とす〝ドル〟に深いかかわりのある二千六百軒のバー、キャバレー、四千三百軒の食堂、レストラン、旅館にしても悩みは同じである。

その他、約五万五千人といわれている軍関係労働者は、基地縮小人員整理の波にもまれるのは必至で、すでに沖縄米陸軍は全軍労働者六百人の大幅賃下げを通告したことも忘れてはならない。

とにかく〝復帰ショック〟をこうむる範囲は意外に広い。なぜそうなるのか――その根因は、二十余年の米軍支配のもとに形づくられた、いびつな〝基地経済〟にあるのではないだろうか。一九六八年度の沖縄の国民総生産は六億四千万ドル（二千三百四億円）、うち二億ドル（七百二十億円）、三〇・七パーセントが基地収入である。米軍基地と結びついた第三次産業が県民所得の七割を占め、第二次産業の立遅れ、第一次産業の衰退が目立っている。このため輸出は年約八千万ドル（二百八十八億円）、輸入は三億ドル（一千八十億円）で、その赤字を基地からの収入や本土援助などで穴埋めして、やっと保たれている経済なのである。

さて、復帰してすぐ基地がなくなるわけではないが、基地は縮小されてゆくだろうから、基地経済から脱却して自立的な経済発展を目ざすことだろう。その開発をめぐって本土でも現在多くの構想が出されているが、これといった決め手はないとのことである。

これに対して沖縄側の声を集約すると①復帰後、数年間、現在の保護措置の継続②開発のための資金の大量投入③開発計画の早急な策定と特別振興措置法の制定、ということになるだろう。しかし、こういう構想に対して「特別扱いを要望する気持ちはわかるが、むしろ次の開発の支障になるのではないか」という見方が本土の一部にあるという。

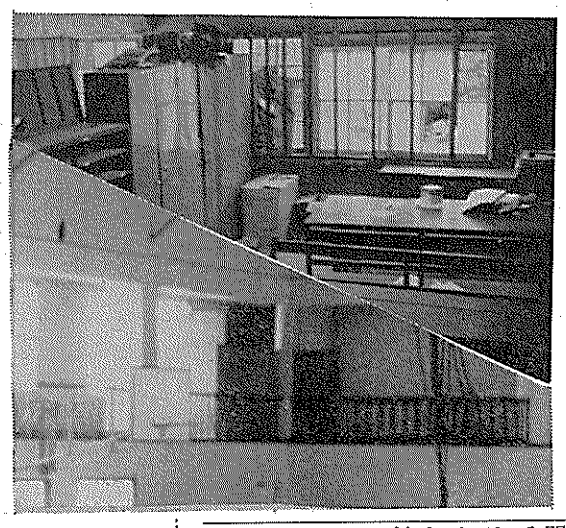
〝沖縄返還〟は日本と米国の問題だった。しかし、復帰のメドがついた今日では〝沖縄問題〟は、一面では主として日本本土と沖縄間の問題になったのではないだろうか。

メガネとコンタクトレンズ
各眼科御指定　アイチ眼鏡店
本町三丁目8―24　TEL㊻3312

手芸専門の店
しらき
若松区明治町

部室は活動の場

あまりに狭い我等の部室



このほど新聞部で部室等に関するアンケートをとった。その理由としては、クラブの部員数増加のため部室内に全員収容できない状態にあるクラブが増した事からだ。又、その他として、部室管理の怠慢などによる、多種のトラブルなどについてである。クラブには、部室をフルに活用している所もあれば置き去りにされている所もある。現状をよく見つめ、改善する足がかりとしようではないか。

現在、若高には長髪、盗難等の風紀問題を初めとし、いろいろな問題が起っているが、これらの問題が解決されていない今日、我々新聞部は、これらの問題の一つでもある「部室の実態」を大きくクローズアップしてみた。そこで若高三十二のクラブ内、二十四のクラブに部室に対してのいろいろな問題点についてアンケートを取ってみたところ、まず部室のあるクラブが二十二、ないクラブが二、次にその部室に対して不満があるというクラブが十八、ないクラブが四、又、具体的な不満として次のようなことがあげられる。

・部室が狭い　二十クラブ
・照明設備の不備　四クラブ
・練習場所の要望　二クラブ

この他にも放送部の音響が悪いということを初め、部室の場所をかえてほしい、盗難が多い等の問題がある。

この結果からもわかるように、ほとんどのクラブが第一の問題点として「部室が狭い」ということを訴えている。そこでこの現状を見てみると、まず演劇部の部室であるが、これは体育館二階の隅の方にあり、だれが見ても、これが部室だとはわかるまい。それは四角い小屋のようなものなのである。廊下にあふれ出た舞台道具が部室の狭さを物語っているようだ。勿論活動は一切、ここでは行なわれておらず、現在一年生の教室を利用して、ミーティング、練習を行なっているという事であるが、思うように活動ができないというのが演劇部の実態である。このように道具だけで部室が一杯になるという悩みは山岳、吹奏楽部も同様である。又二つのクラブが一つの部室を合同で使用しているという現状も数多い。文化部にとって部室は活動の場であるにもかかわらず、この状態である。又、体育部も部室が狭いため更衣が容易にできないという悩みがある。それから照明装置の整っていないということも冬期活動時間の短縮品物の紛失という事につながり、一つの問題点が、次々に他の問題を引き起こす原因となっている。このように、毎日の活動の裏に、各クラブは、部室に対して多くの悩みを持っている。これらのクラブが共通して言いたいことは「充分活動のできる部室を。」ということである。

不便な中で

しかし、このような部室の不便さを乗り越えて、各クラブ共冬期の活動を行なおうとしている。ここに主な活動を紹介してみよう。

演劇部
十二月二十日・二十一日　西日本大会

箏曲部
十二月二十一日　クリスマスコンサート

排球部
冬期合宿

音楽部
十二月二十一日　クリスマスコンサート

弓道部
年末射会

山岳部
十二月二十五日から二十七日まで　葵彦山・犬ケ岳で冬期合宿
一月　新年登山

剣道部
寒げいこ

ハンドボール部
十二月二十五日から二十七日まで　県大会（屋内選手権）

バスケット部
県北大会

野球部
冬期トレーニング

部室の問題は、生徒会だけで一概にかたづけられるものではないが、生徒会とクラブの相談の上、一日でも早く設備の整った広い部室をそろえてもらいたい。そして、安心して活動できるようにしたいものだ。

上　生徒の中心生徒会室
下　活動のわりには…
（演劇部）

雨にも負けず
走る若高精神

校内マラソン大会

雨上がりのどんよりとした空の下で、今年も恒例のマラソン大会が行なわれた。マラソン大会と言えば、一昨年までは、男子だけだったものを、去年、女子も参加してはどうかという意見が出て、一応試みとして、一年の女子だけが参加したのである。それが更に今年は、女子全員の参加について討論され、それがもっと深刻化してマラソン大会自体を、やるか否かを全クラスで話し合ったことと思う。その結果、マラソン大会は実施と決まり、女子も、わずか二・四キロではあるが、参加ということになった。しかし文化祭や模試などが重なり、ほとんど練習ができなかったのではないかと思う。その上、前日にひき続き、当日も雨が降り、中止かと思われていたのに、急に男子だけ行なうことになったため、かなり闘志を失なわれ、そのために参加しなかった人も多かったのではないだろうか。しかし、そんな人達は、皆、同じ条件なのだから、雨が降ったことぐらいで参加しないのは、全くのわがままである。先生の講評にもあったし、総合優勝した二年九組を見てもわかるように、こういう競技の場合、最も必要なことは、全員の協力であり、それがなければ、この大会の意義も成り立たないと思う。

次々と帰って来る選手達の、どうにまみれたうしろ姿は、雨上がりの翻装していないぬかるみの道でのマラソンが、いかに困難であるかを物語っていた。しかし、そのうしろ姿に拍手を送る生徒は選手達に、高校生らしさや、男らしいたくましさを感じたのではないだろうか。

ゴール目前ガンバレ!!

古き時代を訪ねる

歴史部　史跡巡り

去る十二月七日、歴史部主催の史跡巡りが行なわれた。以前から参加者を募集していたが、定員に満たなかったために、歴史部員と先輩などをまじえた二十余名が参加した。当日は、あいにくの雨天で、見学も十分できなかったのではないかと感じられるが、山口市内にある五つの目的地をまわって、無事、計画を終えた。

山口県は、歴史的にも有名であるので、今回の史跡巡りも興味深いものであったに違いない。まず墨絵で有名な雪舟の雪舟庭や、五重の塔がある瑠璃光寺をまわり、更にザビエル聖堂や香山園などをまわって、最後の目的地は、山口博物館だった。この催しは、歴史部が毎年計画していることである。近ごろ活発でないと言われる文化部にあって、こういう積極的な行動は、貴重なものである。しかし、今度の史跡巡りにしても、どうしても交通費などが個人負担となるために、部員にも大きな負担になるし、まして、他の生徒の参加も鈍るのである。しかし、この計画によって得るものも大きい。だから、もっと、活発に行動できるような文化クラブにしたいものである。

先生宅訪問

信念を貫け！

化学担当　斉木先生

北風の冷たさが肌身にしみる師走七日、あ中の感覚がいにくの雨に祟られながらも我々新聞部員は、戸畑の市営住宅にある斉木先生のお宅を訪問する。都会から少し離れた小高いこの地には、まだまだ緑の樹木が残っており、正面には、大きな住宅の建物が見える。一時間余りも遅れて到着した我々は、恐縮しながらも「任務とあらば」の精神で早速ながら図々しく質問を開始する。

—御出身は—

台北で生まれ育ち、終戦後九州に住みついた。

—教師になられた動機は—

最初にそう思ったのは小学校の頃、化学を選んだのは中学校の頃、いずれも先生の強い影響を受けて。

—学生時代の思い出を一つ—

小、中学校共にそりゃ厳しい先生だった。随分鍛えられたけれど今から考えると本当にありがたい気がする。（と、しみじみつかみしい学生の日に思いをはせているかの様に見うけられる。）

—昔の学生と現在の学生との相違点。特に若高生の現状について—

はっきり言ってけじめがない。遊ぶ時は遊ぶでいい。が、真面目にやらねばならぬ時はそう努める。そこには、はっきりとした切換えが必要だ。

—モットーとしている事は—

何事にも誠意をもって納得のいくまで徹底的にやる。

—御暇な時は何をなさっているか—

テレビを見たり、たまには大工をしたりする。（お話によると大工をするにしても自分の気にいった様にで、それぞれ個々の表情でカメラにおさまった。

総ての任務を終えた我々は、いとまを告げようと立ち上がり、家族の方に見送られてお宅を後にする。

—御趣味は—

小説を読むこと。

—御愛読書は—

「人間の条件」

—尊敬する人は—

「ケネディ」

—好きな人は—

「ケネディ」

—嫌いな人は—

「ケネディ」

—ケネディ以外の他は—

「ケネディ」

—ケネディ以外の他は—

「ケネディ」

—ケネディ以外の他

『冬のうた』
（一年生とともに）

◇…佐谷喜久栄選

・夜通しの肌になれたるふとんをばはなれて今日のわれにめざむる　次夫
・冬の山もみじ嵐風に乱れ散りて深空に鴨の矢のごとくとぶ　逸郎
・冬の朝ここうづくしのバッチ母が思いのつたいくるなり　龍一
・けたたましき百舌鳥の鳴き声にふとみれば梢の熟し一つゆれをり　修
・冬の街にひとり歩けばひっそりと宿無し犬の寒い来るなり　信二
・冬来たり空より白きものの降り街行く人も皆急ぎ足　一公
・空の色は冬の領なり学び舎の窓より遠く海につづきて　龍也
・朝焼けに赤く染まりし海面を断崖に立ちてしばし見入りぬ　和弘
・わびしき日海辺に一人たたずめど冬鳥も鳴かず心はれぬ日　章
・わくらばに降り立ちし庭の薮柑子つぶらなる実の目にしみる朝　喜久栄
・赤き実のまき木は枝ごともみじしてたわわなる木をしばし見上ぐる　喜久栄
・学び舎の空は冴えてもかの空は公害の見本か大橋も見えず　喜久栄

ぶんげい

きまぐれ

◎十二月十三日土曜日　雪

さて、今日はクリスマスパーティーの予行演習。まずは、賛美歌で始まる。その後は、野球拳、いや失礼、ローソクの火の下で静かにお祈り、その後野球拳、いや又失礼、どうも最近変な遊びがはやっているようだ。皆さんも、パーティーはやってもいいが、健全で楽しいものをね。でも、クリスマスって何かを忘れないでね。

早期対策を望む
―盗難・遅刻・服装問題―

最近、若高の風紀がかなり乱れているように思われる。長髪許可になったせいもあるが、ここでは盗難・遅刻・服装の三つを取り上げて見た。そして、その結果、風紀委員会の手ぬるさや消極さが目立った。そこで、みなさんに考えてもらいたいことは、風紀委員会のあり方及び風紀問題に対する対策を、自分なりにもっと考えてほしいということだ。

動け委員会

まず最初に、皆さんとも関係のある盗難について述べよう。

私が入学してまもなく他の学校に行った友から「若高は泥棒学校ね。」といわれたことを今でも覚えている。事実、盗難にあったことのない人は、二・三年では数えるほどしかいないことだろう。

	男子		女子	
1	上靴	21%	上靴	58%
2	かさ	15%	ロッカーの鍵	11%
3	下靴	11%	下靴	6%
4	体操服	6%	かさ	4%
5	ロッカーの鍵	6%	現金	4%

二年生を例にとってみると右図のようになり、一番多いのは男女共上靴で、それに続いて男子ではかさ、女子では、ロッカーの鍵となっている。

また男女別の特徴としては、男子では武道の道具や大工道具、女子ではくしや手さげ袋となっている。

ここで、上靴と現金とを例にとってみると、男子では一人当り上靴〇・五足、現金一〇三円となり、女子では上靴一・二足、現金四三円となる。

このことからも、盗難の多さを計り知ることができよう。

中でも一人でかさ四本取られた人や、上靴五足、下靴二足とられた人もいることは、まったく不幸な話しである。

しかし、その反面届け出た人が非常に少ない。数でいくと一%にもみたないほどである。

なぜ届け出ないのだろう―。

その理由としては「どうせ届けても出てこないから」というのが圧倒的に多いだろうが、この「どうせ」という気持が盗難のふえる理由になっているのではないか。

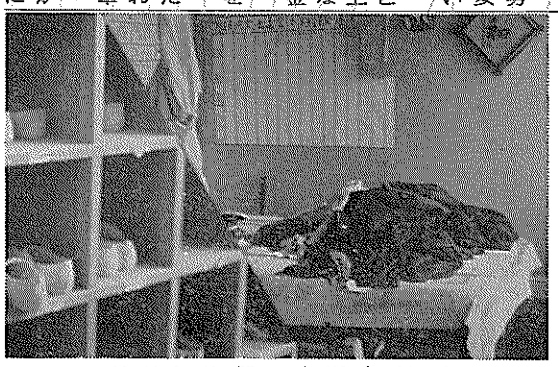
すなわち、届けなければ、泥棒してもだれからもあやしまれず、調べられないからますます調子にのるのであろう。

また、取られた原因としては、「つい忘れて置いて帰った」などと自分の不注意からのものが、多いようである。

ということは必らずしも取った人だけが悪いのではなく、取られた人もある程度の責任はあるのだ。事実、まったく取られたことのない人もいるのだから。

ここで問題となるのが、風紀委員の存在である。

多数の盗難があっているということは知っていることだろうが、その対策はいっこうに聞かない。それだけでなく活動しているのかどうかさえわからないほどである。


ここに盗難のおそれが！

こうした状態では、ますます盗難はふえる一方である。

このままでは、永久に「泥棒学校」という汚名からのがれることはできないであろう。

しかし、生徒会全員が一協力すれば、決して盗難は姿を表わさないであろう。

それには、まず未然にふせぐために生徒の皆さんが不注意をなくすことが心要である。

次に泥棒をつかまえるためにも届け出をしてほしいものである。

そしてもう一つ忘れてはならないのが記名である。

とかく忘れがちだが必ずしてほしい。

また、風紀委員長及び、各風紀委員の積極的な活動と、ともに生徒の自覚を、希望したいものである。

定刻八時三十五分

いま、私たちの周囲は時間との戦いである。―その一つに遅刻の問題が上げられると思う。

四季を通じて遅刻者の数はあまり変わらないが、冬は特に遅刻者がます。寒いせいもあるが、定刻になっても各クラス共、空席が多く目立つこの頃である。風紀委員会にとっては、頭の痛い問題の一つであるにちがいない。

何故、我校は遅刻者が多いのだろう。といっても、一日平均何人ぐらい遅刻をしているのか見当がつかない。しかし、他校よりも多いことは確かである。明確な数がでてないのは、風紀委員会が取締まっていないからである。一カ月程前は風紀委員が数日前には先生方が二人門の所にたっておられたが、この頃はみうけられない。

また、遅刻する理由は人それぞれさまざまであるが、もっと早く来れないものだろうか。朝早く、遅くから来る人もいるのに遅刻に対する対策として、個人の自覚とともに風紀委員の取り締まりが必要である。そこでいいたいのは、風紀委員会は遅刻に対してどんな対策をとっているのであろう。現実には何ら対策が示されてない状態である。こういうことでいいものであろうか。

そして、個人の自覚とともに何らかの方法によって抑制されなければ、遅刻者はふえることがあっても減らないであろう。もっと、風紀委員は活発に行動してほしい。風紀委員もやはりみんなと同じように、朝早く学校に来ることはこれから先辛いことであるが、それをのりこえ遅刻者がゼロとなるよう努力してほしい。遅刻者をゼロにすることはなかなか容易ではない。しかし、毎日何らかの方法で取り締まれば遅刻者は減る。遅刻者数ゼロも可能である。

風紀委員がもっと活発に行動することを望むとともに、みんなの協力をもとめ、遅刻者なしの学校にしょうではないか。昔から「早起きは三文の得」と、いわれているように、今から先、早起きを実行してみてはいかが。

清潔な服装で

だんだん、学校生活に慣れてくると、精神のたるみが生じてくるのか、服装面やその他の面においてみだれが生じてきている。

そこで、服装面について、近頃の若高生を取り上げてみたいと思う。まず、男子の方では、普通のズボンをストレートやラッパなどにしている人がかなりいる。また長髪のせいか無帽子の人が多くなった。女子の方でも、スカートを短くてもひざ上5センチ程度まで上げ今はやりのミニにしている人を、時々みかけることがある。また、校則では髪をカールしてはいけないのに、している人がかなりいるようだ。しかし、自分が良いと思ってしていることでも、人によっては見方が違うことを忘れてはいけない。やはり、学生は学生らしくきちんとした服装・髪型を取り、そして、校則を守るようにしてほしいものだ。

最後に、服装に関しては、自己の判断にまかせるが、清潔さをいっも忘れないように心がけてほしいものだ。

他校訪問

一、正しく生きること
一、暖かみを持って生きること
一、やさしく生きること
一、上品に生きること
一、力強く生きること

去る十二月十五日我々新聞部が訪問した青葉女子高等学校の校訓である。文化祭などで行った人も多いと思うが、高塔山の下にあり高塔中学下のバス停から歩いて数分とかからないこの学校は、たいへん見ばらしのきく、健康的なところである。青葉高校といえば、若高のとなりにあるといってもよい程近くにあるので、何となく、校風などわかっているようだが、その実あまり知らないのではないかということで、訪問したわけである。

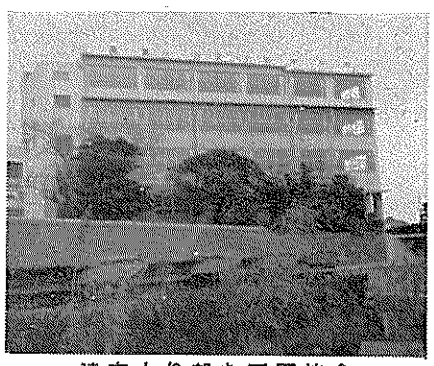
ここで、上靴と現金とを例にとってみると、男子では一人当り上靴〇・五足、現金一〇三円となり、女子では上靴一・二足、現金四三円となる。

このことからも、盗難の多さを計り知ることができよう。

中でも一人でかさ四本取られた人や、上靴五足、下靴二足とられた人もいることは、まったく不幸な話しである。

しかし、その反面届け出た人が非常に少ない。数でいくと一%に

礼儀正しい雰囲気
―青葉女子高等学校―


遠方より望む正面校舎

青葉高校といえば、三年二五四名で成り立ちそのうち各学年とも商業科クラス一、普通科クラス二の四クラスで編成されている。

進学する人は少なく各クラス、二、三人の割合で、主に西南大学等の短期大学へ行くそうである。殆んどの者が、銀行、デパート関係の職につくそうである。

我々が体育館を見学したときはバスケット部が、練習をしていたが、特に有名なクラブは庭球部であり、全国大会でも優成績をおさめている。我校にはないクラブには、タイプ部、服飾研究部がある。

授業は、クラスによって異なるそうであるが、三年になると洋裁、和裁、調理が週に何時間あるそうだ。やはり女子高である。そこでは芸術選択はなく全員が音楽を受けている。授業として、美術や書道はしてないとのことである。又、週一時間礼法の授業があり、そこでいろいろなマナーを勉強するそうである。そとして専門的なことを習っているようだ。又、それなりに設備も完全なものであり、教室にはミシンが、調理室にはレンジが、というように、授業が、で年二回。方法は、我校と全く違った方式で、まずクラスから一人立候補させ、生徒の投票によってその中から票の多い順に会長、副会長を決める。生徒総会は生徒の意志によって、行なわれないことになっているそうだ。

規制は多く、まず長髪についてはカール禁止、長くなると必ずみつぐみをすること、リボンは、黒か紺を使用など……。靴、靴下などは学校規定のものを、服装については、乱れていると先生や補導委員が注意をし、注意されたらその場できちんとするそうである。

盗難はめったにないが、寒くなると遅刻がふえるそうだ。

男女交際は、親が認めているのならいいらしいが、それ以外だと絶対禁止で、もし見つかった場合は親が呼ばれるそうである。

編集後記

礫陵新聞一一号いかがでしたか。解散問題そして改選と何にかと忙しかった生徒会も一段落つきあとは駅伝と終業式を残すだけとなった。どのクラスでも、冬休みの計画にと、花がさいていることだろう。

我々部員一同も風の吹きぬける部室で「皆さんによい新聞を」とはりきっています。

短い三学期を充実させるためにも、冬休みをおおいに利用しようではないか。

―今と昔―
親しみの持てる古典

最近、冬又は正月の娯楽というものの内容が急激に変化してきたような気がする。今、若者達の間で盛んになってきたボーリング・スケート。女性に多い洋画ファンなども、その例であろう。我々の幼い頃の正月は、近所の仲間を集め、コマまわしやタコあげ、又、女の子なら羽子突等をよくしたものであった。ところが、今の小学生といえば、デパートのおもちゃ売り場でよく見かける多種多様のゲームやトランプ、果ては花札まで、というように変わってきた。

正月の遊戯として古くから在るものに、百人一首（歌がるた）というものがある。戦前派の人達には馴染深いものであろう。これは、皆も知っている通り、藤原定家が選んだといわれている小倉百人一首をさし、昔から、歌を作る時の手本とされ、また、正月の遊戯の「歌がるた」として用いられ、現在に至っている。

若高では、毎年、図書館主催で百人一首クラスマッチを行なっていて、正月の一日を楽しく過しているそうだ。

今の若高生の中には、これをしたことがないという生徒は決して少なくはない。百人一首をする事は、古典に親しむということにつながり、古典への興味もより一層深くなるのではなかろうか。これが、我々の一番身近にある古き良き物なのだから。

最後に百人一首の川柳を紹介しよう

御父子して
千と百とをおんえらみ

藤原俊成は「千載集」を選び、その子定家は「百人一首」を選んだ。

本格派テクニックの店
アサヒラボ
本町三丁目

キミの未来を創る〝英語塾〟
アカデメイア
連絡先 TEL㊻3383 佐竹畳店

すぐれた品を より安く ご奉仕
若松
柏 丸柏
本町3丁目 TEL ㊻1231